

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

天使の牙

配給/ワーナー・ブラザース映画

2003 (平成15) 年8月31日鑑賞

Data

監督：西村了

原作：大沢在昌

出演：大沢たかお／佐田真由美／黒
谷友香／萩原健一／佐野史
郎／西村雅彦

👁️👁️ みどころ

ハードボイルド作家大沢在昌が最も映像化を望んでいたベストセラー小説『天使の牙』を、美人モデル佐田真由美を主演に大抜擢して映画化。脳移植によって二人の人間が合体し新たに誕生したアスカは、真実の愛を貫くことが出来るのかというテーマが面白い。他方、悪の組織と警察の組織の「対決」には芸達者な役者が勢ぞろい。もっとも、美女二人のインパクトだけで十分な説得力あり・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<大沢在昌原作のベストセラーの映画化！>

原作は1995年に出版され人気を呼んだ、ハードボイルド作家大沢在昌のベストセラー小説『天使の牙』。心と体を入れかえた女刑事明日香（アスカ）が主人公となる異色作品だ。なぜならハードボイルド小説では、大沢在昌をハードボイルド作家として一躍有名にした、1990年の『新宿鮫』のような中年刑事、つまり男が主人公になることが当然と考えられていたからだ。この大沢在昌の原作におけるヒロイン明日香は警視庁保安二課に勤務する女刑事だが、大柄で武術も強く、並みの男では到底かなわないオンナ・・・。そしてその明日香が仕事上コンビを組む男性刑事が、『仁王』の呼び名をもつ古芳和正刑事だ。

パンフレットによると、この作品は大沢在昌が「最も、映像化を望んだ作品」だったが数々寄せられたオファーを断り続け、今回「やっと」映像化に至ったもの、とのこと。つまり原作者大沢在昌のこの作品についての映像化へのこだわりが満足された映画というわけだ。もっともそれは、映画が小説と同じように描かれているということの意味するわけではない。

パンフレットの冒頭に大沢在昌がこの作品の映画化について長々と書いている（説明している）が、その中に、「映画は原作者ではなく、まず監督の作品である」と書かれているように、小説（原作）と映画は全くの別物なのだ。従って、原作を読んでいなくても、スクリーンを見つめる中でストーリーの展開にワクワクし、登場人物の動きに感動するような映画をつくることができるかどうかが問題なのだ。

<作品の前提としての脳移植>

この映画ではもちろん、原作でも、完全な「脳移植」が行われることが大前提だ。すなわち「身体は多くの銃弾うち抜かれボロボロになったが、脳には損傷のない」女刑事河野明日香という人間と、「身体には何一つ損傷はないが、ただ一発の銃弾が貫通したため脳が破壊されてしまった」女性神崎はつみという人間とが合体し、神崎はつみの身体と河野明日香の脳をもった新たな女性（人格）アスカの誕生が物語の基本だ。

医学の現状ではこのような完全な脳移植は無理。将来的な可能性もかなり低い。さらにクローン人間と同様、生命倫理上も完全な脳移植の実現には多くの問題があることも当然。しかしまあ、それはおいといて・・・。

この映画は、この医学的手術が完璧に施されることを前提としているものだ。

<二人の美女の登場>

この映画の女主人公、神崎はつみ役 とアスカ役の二役 に大抜擢されたのは、ファッション雑誌『V i v i』のモデルとして活躍していた佐田真由美。もちろん映画初出演でのいきなりの主役。新聞やポスターで見る意志力の強そうな目がとにかく印象的。私などは、彼女の写真を一目見ただけで、頭の中からその印象が滲れず、この映画は必ず観なければ、と思ってしまった。そして、私のこの佐田真由美という女優に対する期待は、映画が始まってから終わるまで裏切られることはなかった。

もう一人の美女は黒谷友香。これも私の大好きな美人女優。新聞やコマーシャルで見てとにかくキレイな女の子だと思っていたところ、映画『魔界転生』（03）で「おひろ」の役を演じるのを見てあらためて好きになった。警察という男社会（組織）の中で、かなりの無理をしながら生きていく女刑事、河野明日香をカッコよく演じつつ、他方では自分の弱さを唯一見せることができる恋人、古芳和正との間での女心の揺れ動きを見事に演じている。この映画では、この二人の美女を見ているだけでも十分楽しめるというものだ。

<ちょっと微妙な刑事役の大沢たかお>

女刑事河野明日香の先輩であり、恋人でもある古芳和正刑事（大沢たかお）は、麻薬組織「クライン」との間の長年にわたる闘いの中、数々の修羅場を踏んできた。そしてその中で、優秀な信頼できる刑事の「裏切り」にも直面せざるをえなかった。彼が仕事上で、「自

分以外は誰も信じるな」と明日香に言うのは、そんな彼の経験に裏付けられた言葉だ。もっとも、明日香の恋人としての古芳はちょっと中途半端。かなり無理をしながら女刑事の仕事をしている明日香に対して「辛かったらいつでも辞めろ！」と言うものの、「仕事を辞めて、俺の胸に飛びこんで来い！」とは言わない。明日香が、「私たちの関係はこれからどうなるの……？」と不安を打ち明けているにもかかわらず。これはちょっとズルい……。男の私でもそう思ってしまう。さらに、これは余談だが、最後の最後に再び脳障害をおこし、幼児レベルの脳となってしまった明日香を、「これから新しく二人でやっていこう」と抱きしめるところなどは、女性から見れば「なんで最初から守ってやらないの？」と非難(?)されてもやむを得ないのではないだろうか……。現に、私の後ろの席に座っていた二人の若い女性客は結構大きな声で、この古芳のやり方(?)を批判(?)していたが……。

<達者な脇役陣ショーケンこと萩原健一、そして西村雅彦、佐野史郎>

この映画は1時間59分と結構長い。それは、脳の移植という大前提を描き、麻薬組織と警察との闘いを描く上にさらに、その上に悪のカリスマ、君国辰郎(きみにくに たつろう)(萩原健一)の人物像や、警察組織における佐野史郎と西村雅彦の人物像を描いているからだ。君国は冷酷非道な悪の権化。しかし、そんな君国も12歳の時から愛人として育ててきた神崎はつみに対しては限りない「愛情」を注いでいる。そんな役柄をショーケンこと萩原健一が重厚に演じている。

他方、これを追う警察組織は分裂気味。古芳刑事や河野明日香の直属の上司である芦田課長は、佐野史郎が演じているだけにちょっと妖しげな雰囲気だが、実は真面目タイプ。

これに対して、芦田の上司であるキャリア組の中西警視正を演じるのは西村雅彦。これも佐野史郎に負けず劣らない個性派俳優だが、実はこれがワル! このため後半彼らの動きをめぐって話が二転三転していくことになる。彼らの達者な演技には拍手だが、私としては古芳刑事と明日香(アスカ)の恋愛劇的を絞った方がよかったのでは……という印象が強い。

<主題歌はあのロシアの問題児、t. A. T. u>

この映画の主題歌「ノット・ゴナ・ゲット・アス」を歌うのは、ロシアの18歳の同性愛女子高生のt. A. T. u。ジュリアとレナの二人だ。もっとも彼女らは、歌よりも、今年の6月来日して「ミュージック・ステーション」に出演する約束をしておきながら、生放送中、突然の出演キャンセルをして有名になってしまった。日本を離れる時のコメントも、「私たちは何も悪くない!」と言い放っていたが、きっとそれは彼女達の正直な気持ちだろう。この「ノット・ゴナ・ゲット・アス」はラストに字幕と共に流れるが、「私たちは捕まらない」「あなたへの私の愛はいつだって永遠 大切なのはあなたと私だけ それ以

外はなんでもないので「今はなにもこれを止められないだってあなたを愛しているから」という歌詞は単純で分かりやすいもの。結構イイ歌だ。

<総評>

この映画の評価は難しい。原作者の大沢在昌が最も映画化を願っていた作品という意味はよく分かるし、佐田真由美、黒谷友香の二人の美人女優、そして大沢たかおとのトリオは十分に存在感があり、ストーリー性も十分。そして、悪のカリスマ萩原健一とこれを追う警察組織の佐野史郎と西村雅彦との絡みも十分面白い。しかし、映画に多くのものを持ち込み過ぎたという感じが否定できない。私としては、悪の権化の追求と、警察官のパーソナリティーへの興味はホドホドにして、若者同士の「愛」に的を絞ってほしかったと思うが、どうだろうか？

この作品が日本でヒットするのかどうか、そして原作と同じように第二作まで着手されるのかどうかに注目していきたい。

2003（平成15）年9月1日記